

## 山の神祭り

かつて、屋久島には「山の神祭り」と言う行事があった。旧暦の正月・五月・九月の十六日に山仕事に従事するものがその日は山仕事を休み、親方のお宅に集まり山の神様にお供えをし自然の恵みに感謝した。

しかし、文明社会が押し寄せ、暦が陰暦から陽暦へと変わり、ますます生活が自然から切り離されていくに従いこのような祭りは廃れていった。

屋久島において、聖なる地に生える銘木を切らんがために屋久島の「シシ神」の首を取った。それ以降屋久杉は現在に至るまで切られつづけてきた。そんな中でもこの山の神祭りは、山の神の怒りを抑え、自然の恵みを頂く事への感謝の気持ちを維持してきた。その自然への感謝の気持ちまでも今忘れ去られようとしている。

このような中で、屋久島ガイド連絡協議会では、この山の神祭りの日は山や海へは入らず、総会やイベント、勉強会を企画している。ガイド皆が集い、屋久島のこと、自然の事、ガイドの事を語り合う日と位置付けている。

自然の恵みを最も享受しているガイドがもう一度山の神祭りの意味を捉えなおし、屋久島におけるガイド業のあり方を考えていきたい。

この山の神祭りが定着し、島内外で「この日ばかりはガイドさんは誰もガイドしてくれないよ、だって山の神祭りだもの。」と認知される日を夢見ている。

## 1. 西部林道マウンテンバイクツーリング

藤村 早苗

## 2. 宮之浦川チューブラフティング

岡田 愛

### 西部林道MTBツーリング

梅雨の始まりのある日、1台のMTB (マウンテンバイク) が事務所に届いた。白く真新しいボディーにはグリーンとネイビーのラインとともに「GT」の文字が光る。持ち主の小原さんは届いたその夜に駆けつけてMTBを組み立て、梅雨の晴れ間を見てちょろちょろと走らせていた。「天気にならないかな…」とつぶやく日が続いた。

そんなある日、ツーリングに行くことが決まった。山の神祭の翌日の午後、真新しいMTBと私の大学時代から乗りこんだMTBを車に積んで、西部林道へ走った。うす曇の空は今にも雨を降らせそうだったが、MTB バイカーの気持ちは高揚している。

永田灯台の分岐で1台の車を置いて、残りの車に荷物を移して更に先へ進む。しっとりした薄暗い森は静かで自分たちの車の音だけが響く。コースの案を練りながら車を走らせているとヒズクシの大きな岩壁が見えて来た。ここで車を止め、スタートする事にした。

MTBを組み立て、セッティングを整え、いざ出発。私の愛車は久しぶりのツーリングにブレーキをキーキーと音を立てて喜んでいる。小原さんのMTBも快調だ。

MTBは走り出した。ひんやりとした風が体をすり抜けて行く。普段、車では感じられないようなアップダウンを感じながらハンドルを握る。そうそう、私にはこの感覚がたまらない。

私が始めてMTBに乗ったのは、大学2年生の夏。京都の松尾大社にツーリングにいった時だ。初心者向けのコースで、コンクリート舗装の1本の林道を登って同じ道を下る単純なコースである。それまで運動と言う運動をしたことなかった私が、スポーツバイクにまたがり頭にはヘルメット、手にはグローブと言う格好で走っている。何ともおかし

な感覚だった。始めは快調に走っていたものの上り坂に差し掛かると次第にその元気も無くなりつらく感じ始めた。「こんなしんどいもののが楽しいんだろう…」とブルーになっていた時、風が勢いよく吹いた。竹林の林道はさわさわと涼しい音を立て、細長い黄色くなった葉っぱが太陽の光を反射させながらキラキラ輝き、一斉に舞い落ちた。とても美しい光景に黄色い葉っぱが全て落ちるまで目を見張った。それは今でも忘れられない、MTBに魅了された瞬間だった。まぎれもなくMTBが私に見せてくれた光景だった。

それから私はMTBと一緒に。大学でツーリングがあるときは一緒に2時間かけて電車に乗っていったし、一緒に旅行にも行き四万十川を下ったりもした。そして、屋久島までも…。

新緑も終わり、緑が落ち着いてきた西部林道は穏やかだった。MTBをゆっくり進める。早すぎず遅すぎずMTBに乗ったまま、まるで絵本のページをペラペラめくるような速さで森の中を進んで行く。林道沿いに落葉樹にも新しい葉が茂り、西部林道の薄暗い緑の回廊に行く。次のカーブの先にはどんな景色があるか期待しながらペダルをこぐ。

すると、森の展望台に出た。ここ

から西部林道の森が一望できる。今日はあいにく曇りで山の上には雲がさしかかっているが、なだらかに緑のペールが山肌を覆う。照葉樹の樹幹がブロッコリーのように上のほうまで続いていた。

更にMTBを進める。「川原」と呼ばれる地域に出た。沢の涼しい音が聞こえてきた。川原1号橋の下にはきれいな沢が流れている。「ツーリングの休憩としてここで水浴びをすると楽しいかもね。」と小原さん。夏のツーリングは何せ暑いのがつらい。木陰を探しつつ走るが、屋久島では沢でクールダウンができる。なんという快適なツーリングになることだろうか。

川原の沢を渡り、少しきつめの上り坂を行くと海が見えた。森をぬけて姿を現した海はより一層大きく見えた。グレーの海の水平線に浮かぶ小さな島、口永良部島。今日はかすんでいるので青い稜線をうっすらと海の上に浮かび上がらせている。そんな海の風を感じながらMTBは走っていく。

「半山」地域に入ってきた。また森の中に入って行く。ふと、視線を感じて森に目をやると、森の住人のサルが驚いた表情でこちらを見ている。車を見なれている彼らにとってはMTBは奇妙にみえたのだろうか、MTBのキラキラ光るホイール



をじっと見ている。肩間にしわを寄せてこちらを見ているのが可笑しい。「驚かせてごめんなさい」と思いつつ、そっとMTBを動かした。

更に進むとカーブの向こうに大きな土砂崩れの跡が見えてきた。ここは少しきつめの上り坂。とりあえず、登りきってからこの凄い土砂崩れ跡を見よう。上から眺めると山の高い所から海まで1本の土色の道がむき出しになっていた。しかし、大きな岩の間から小さな芽が生えてきて、土砂崩れの難を逃れた木々はより光を得ようと一斉に枝葉を広げようとしている。森は着実に回復していた。

MTBは森を抜けた。すると、海の向こうに屋久島灯台の白い姿が見えた。屋久島灯台を見ながら坂を下るとそこに残しておいた車が待っていた。

MTBを止めツーリングは終了。…のはずだったが、「うーん、もう少し走ろうか。」と小原さん。小原さんの愛車はまだ走り足りないようだ。そして、小原さんも…。暗くなるまでにはまだ時間もあるし、もう一丁行きますか。

日の陰り出した西部林道へ、スタート時に残した車をとりに戻りつつ、本日第2段のツーリングコース案を練り始めた。<藤村早苗>

### チューブラフティング奮闘記

「チューブラフティング」とはいかなるものか。要はタイヤチューブを大きく膨らませ、それにお尻をはめて川を下ればそれでよい。そもそも市川氏がボルネオのダナンバレーで味をしめ、病みつきになったことがきっかけだが、宮之浦川というこれまた都合のいい銘川が、この桃太郎のスポーツをYNAC(の一部)でツアー化を試みるほどまでに火をつけたのである。聞いたことはあるがやったことがなかった私も、発案者の市川氏があまりにも楽しそうに試走から帰ってくるので、つい引き込まれた口である。

とは言えツアー化するとすると、安全性はもちろんのこと乗り心地も追求しなければならない。

初回の試走では、比較的スムーズに行く流れのある早瀬はいいとして、ひとたび流量が減ればチューブだけでは進めない淵をいかに快適に進むかが課題となった。そこで、壊れたカヤックパドルをぶったぎった、シングルパドルが発案された。



さらに、ドーナツの真ん中から出してしまうお尻と、石にアタックするチューブも保護すべく、チューブの改良に着手した。

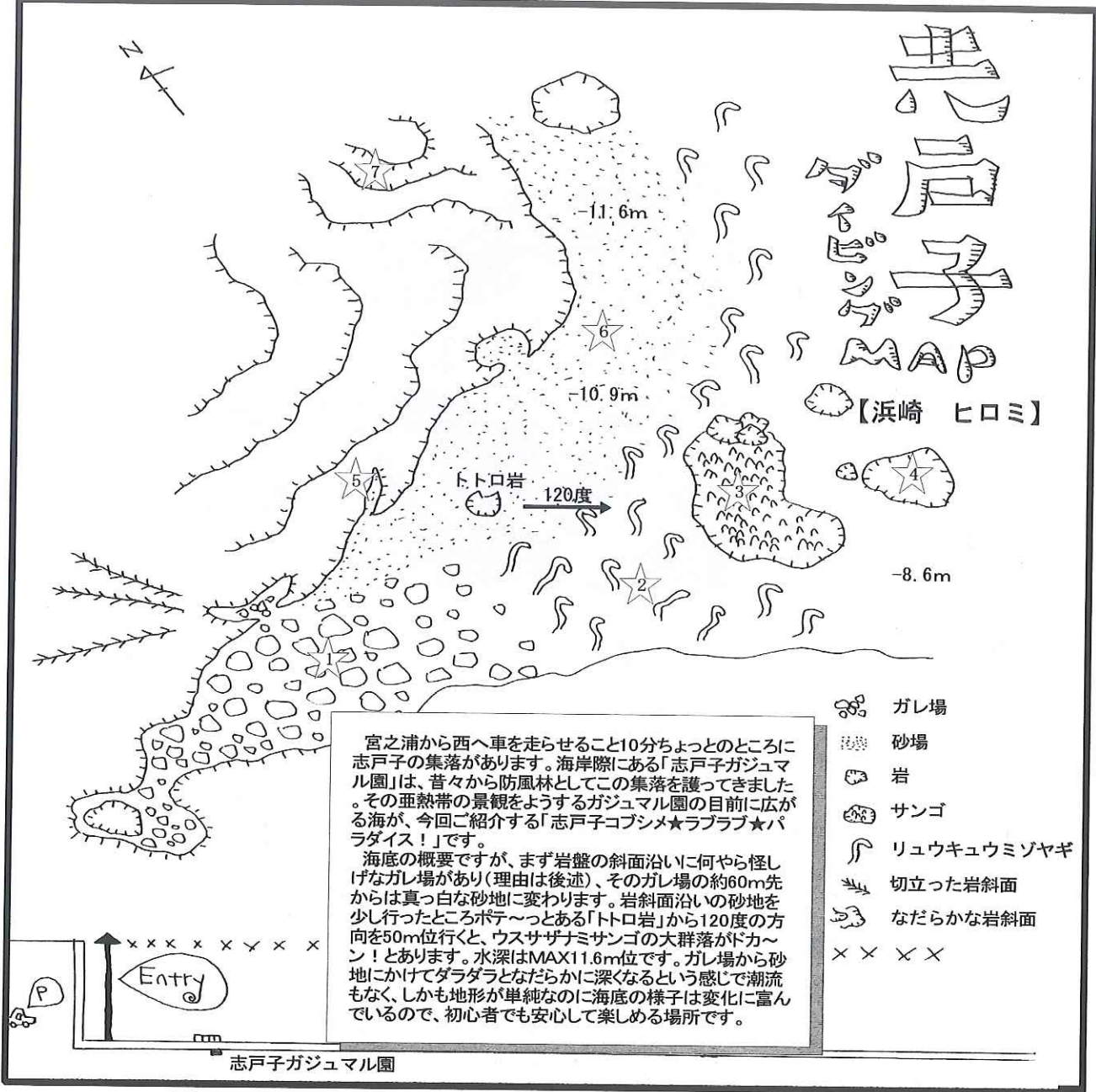
改良作戦第一段、チューブにロープを網の目状にはることを思いついたが、これがなかなか、私が張った網は乗っているうちにチューブの曲線に沿って滑り落ちてしまい、2回目の試走は失敗に終わった。そこで登場、看護婦さんの清水さんにずばらな私の結び目を丹念にやり直していただいたところ、見事頑丈な尻当て付きの、何とも快適なあけみ号(清水さんの名前をとって)が完成したのである。負けじと私は原点に戻り、ロープを編むことからスタート。少々編み物をかじっていたので、鎖編みで小さいチューブのプロテクターを作り、何とかあけみ号(私の名前)を仕上げたが、如何せんこの方法は手間がかかりすぎるので実用化は難しいのであった。

さて、いよいよ実用化か! 雨の少ない5月下旬、屋久島らしからぬ気候が続き、不安を抱えながらもいまいち水量が少ない宮之浦川にリピーターの新婚さんお二人と半日ツーリングに出かけた。お客様を連れていくとなるまた勝手が違い、今度の課題は荷物運搬法である。市川さんのビデオはさておき、お客様のカメラをどうやって運ぶのか思案し、今回はリュックサックに防水バックを選択した。まだまだうまくコース取りが出来ない私は、瀬で転びつつも、ゆったりと川の流れに身をまかせ、水の音と静寂の中、同行の3人とともに、桃太郎のように川を下った。途中の深い淵ではスノーケリングも楽しめ、ちょっとした岩の高台から飛び込みもできる。子供みたいにはしゃいだ30うん歳市川氏

と24歳の私であった。ところがである。童心に帰る宮之浦川ツーリングも終盤にさしかかった頃、ビリ! アイヨー!!。何かと思ったら隊長市川氏の悲鳴であった。お尻が破けた音ではない。本日試作の荷物運搬用リュックが破け、防水バックが流出、水没したのである。つまりどういうことか、お察しの通り、大事なお客様のデジカメがああ・・・。

結局次の日にデジカメは復活したらしく事なきを得たが、その教訓を次回に生かさなくてはならない改良作戦第2段、先日4度目の試走では、早速バイクの荷を固定する網で荷物をチューブに固定する運搬法を確立。このときは道具の改良もさることながら、雨上がりで水かさが増し、快適なツーリングであった。しかも、水かさが増すこんな時は川の下流に高級品の屋久杉の流木を拾いに人が集まると聞いていたのだが、なんと宮之浦橋手前で突如ひっそりとしゃがみ込んだ「流木見張番」おじさんの姿もおがむことが出来た。

新製品開発は紆余曲折を要し、まだまだ開発途上にある。確かに乗る姿は傍目に怪しく、ウェットスーツを身にまとい、ライフジャケットにヘルメット、しいてはシュノーケルにマスクを装着した出で立ち、差詰め宇宙人が一人乗りUFOに乗った感じで、4度目試走のスタート地点では、橋の上から見ていた親子が我々2人に微笑していた。がしかし、山の上から一生を終えて流れ落ち、やがて海に帰る流木や木の葉のように、ただひたすら流れに身を任せてゆらゆら水面を漂う感覚は、他にはないチューブラフティングの醍醐味だろう。ツアー実現の暁には是非お試しあれ! <岡田愛>



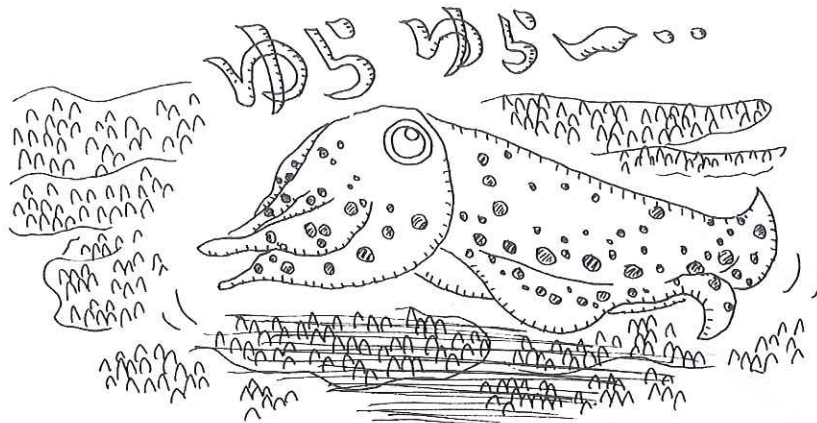
**①石の下をそ〜と覗いて見てごらん♪**

ガレ場にゴロゴロと転がる何気ない石をそ〜とめくって、グ〜と顔を近づけてみましょう。さて、何が見えるでしょう？私がある時、大きな石の下に見たものは、半透明のコウイカの卵！中に卵が一つだけのもので二つ入っているものと2種類そこにはありました。そしてそれはたわわにユサユサとぶらさがってありました。卵をまじまじ見てみると、中には小さくてもちゃんとイカの形をしたbabyが入っているのが見えました。

また、松本氏によると、イソギンチャクをひとつづつ両手にモサッとくっつけたキンチャクガニ(その大きさ、わずか1cmくらい)がかなりの確率でいるそうですよ。さあ、あなたも石の下をそ〜と覗いて見てごらん♪

**②半透明なあなた…**

砂地の片側にピョンピョンと鞭みたいに伸びているリュウキュウミソヤギをしげしげと見つめると、何か半透明で小さきものがススス〜と動いています。〜正体はいかに！？…その正体はガラスハゼ。内臓までスケスケですよ〜そんなにも何もかも見えちゃっていいのですか？なんて密かに心配しちゃいます(笑)

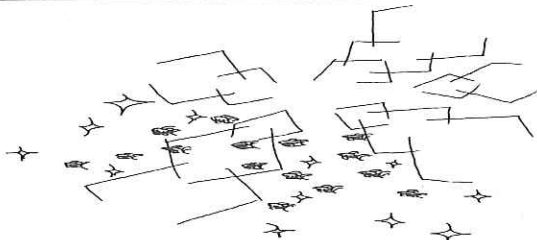


### ③ウスサザナミサンゴの大群落の上にユラユラ揺らめく宇宙船??

トトロ岩から120度の方向に50m位ゆくと、ドカーンとその風景を支配してしまっているようなウスサザナミサンゴの大群落があります。そのサンゴの根には実に様々な生き物たちが息づいていて、それはそれは賑やかな「町」となっています。

2000年6月、そのサンゴの上に揺ら揺らゆらめく巨大な宇宙船がありました。息を殺して近づいていくと、その数なんと12匹。んっ？匹ということは動物？そう、それは50cmはゆうに超えようという巨大なコブシメ達だったのです。繁殖・産卵の為にこのサンゴに集まってきているのです。数匹のオスがメスを奪い合う姿などはまさに危機迫るものがあります。

そして無事交尾を行ったペアは、サンゴの隙間にひとつひとつ大事そうに卵を産みつけてゆきます。メスが産卵しているその傍らにはオスがぴったりと寄り添って見守っています。他のオスに邪魔をされない様、気が気ではないのでしょう。コブシメ達の恋の季節。あなたも一度その恋の波乱の行方を見にいらしてください★



### ④水面を仰ぎ見れば、光のシャワーを浴びてキラキラと煌くキンギョハナダイの群れ

ハマサンゴの根の上方にふと顔を上げてみると、そこにはこぼれんばかりの光が溢れていて、その光の渦の中に、赤いその体をキラキラと光らせているキンギョハナダイの群れがありました。彼らはいつもこのサンゴの根についています。竜宮城とはこんな所なのか・・・？と、思わずその光景にボーっと見とれてしまい、時がたつのを忘れず。そして私は浦島太郎になるのです(笑)。



### ⑤薄暗い穴は覗き込んでみるべし！

薄暗い穴はぜひ覗き込んでみてください。

だんだんとその暗闇に慣れてきた目には、実にこの世のものとは思えない、まるでウルトラマンの世界に生きるような生き物達(例: パルタン星人=セエビ)が息を潜めて夜がくるのを待っています。その中にイセエビなど見つけた日には、思わずその長いヒゲをひっぱり、つかまえて、我が家の鍋で真っ赤に茹でてあげたくります(笑)

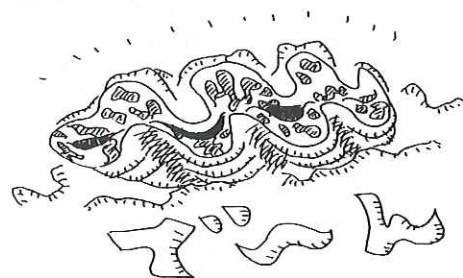


### ⑥砂地に飛び込みっ

砂地には実にたくさんの生き物達が息を殺し、身を潜めています。スラリとした体形にうろうるお目々のギンポやら、巣穴作りとその際の見張り役という仕事を2匹で分業し共に暮らしているハゼとエビやら...

フィンで砂埃を巻き上げない様、気を配りながら、砂地すれすれをそ〜と探索してみましょう。こちらもそこに潜む彼らを注意深く見ている(見つけようとしている)わけですが、彼らだって我々をさらに注意深く見ているわけです。さて、どちらが先に互いの姿をみつけられるかな？

あつ、今、目の前で砂に飛び込んでいったのは誰！？



### ⑦持てるんですっ

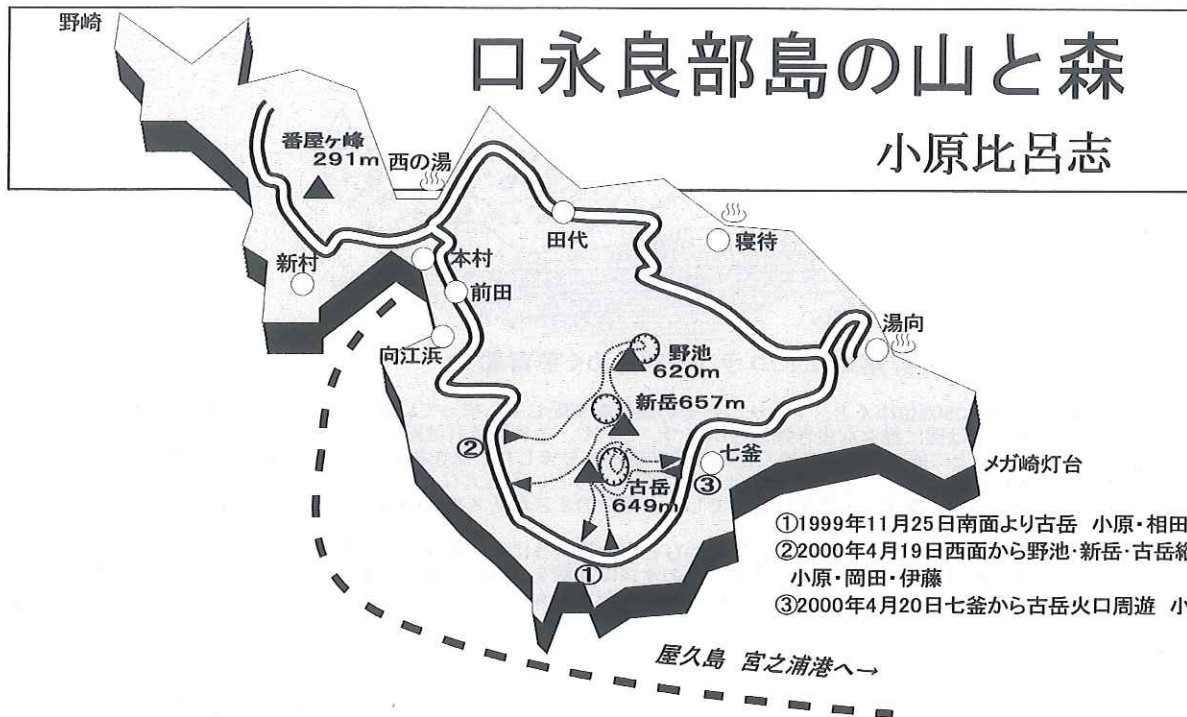
岩の割れ目に30cmはゆうにこえるビッグなおオシャコガイが大口をあけてモゾモゾ...そのビラビラした肉片のだんだら模様は、黒と青の原色がまぶしく、なんだかとてもSFチックです。松本氏によると、ヒメシャコガイよりもその殻の縁の波打ち方がダイナミックらしいです。激しく波打つその口に、挟まれないようそつと両手で持ち上げてみましょう♪んん〜重い〜！！

## おわりに

海の中は陸上とは違って、中をちらりと覗くだけで、自分のすぐ目前に動物たちが生活している活気溢れる光景が見られるというのが一つの大きな魅力だと思います。本当に口をポカンと開けて見とれてしまうくらい、陸の上の世界とは全く違う世界です。(しかし本当に口を開けてしまうと、海水でおなか一杯になってしまうので注意が必要です【笑】)

でも、その「大きな目」つまり広い視野で全体を見て(ああ、きれいだなあ)だけで陸に上がってしまうのはもったいない！ちょっと待った！と私は思うのです。

ちょっと視点を低くして自分の「小さな目」を開いてみれば、あなたの瞳に飛びこんで来る【面白くも不思議な世界】は何十倍にも何百倍にも広がるはずですから★海はまだまだ……解からない事だらけ。さあ、御一緒にその「ミラクルワールド」を体験しましょう！！(ヒロミ)



### 口永良部の登り方

口永良部をひよっこりひょうたん島だとすると、小さい上半にあたる島西部に番屋ヶ峰、大きい下半の島東部に北から野池、新岳、古岳の3つの山がある。口永良部で「岳」といえばこの3峰のことだ。麓から見ると全体にぼんやりした山容で各ピークの境界もはっきりしないが、登って見れば、景観は一転、それぞれの強烈な個性を目の当たりにすることが出来る。

さて、登山といえば登山道、と思ってしまうが、この山の地図に登山道は描かれていない。実際行ってみても、特に決まったルートがあるわけではなく、自分でどこをどう登るのか決めなければならない。

逆にいうとどこをどう登ってもいいということだ。山に登るのにもいろいろ気をつかわなければならないことの多い現在、珍しくラジカルな楽しみ方が可能な山。いわば自由登山のパラダイス。

当然のことながら素人には危険な山である。標高こそ低いけれども、あくまでも判断力と行動力を身につけている一人前の山屋のみが向かうべき山だ。地形図が読めなければ話にならないし、そこかしこに潜む危険を察知してそれを避けつつ行動しなければ、深刻な事故を起こす可能性が高い。観光のついでに登れる山ではない。

### 口永良部の植生と登山ルート

自由登山なんていいだしてしまっただけでも、これには植生学の知識があると助けになるし、なにより面白い。

口永良部島ではすでに植生図が作られていて、これ

を見ると

- 1、シイ・タブの照葉樹林
- 2、カンザンチクの猛烈なヤブ
- 3、クロマツ林（植林地？）
- 4、火山性の荒地

の4色におおむね塗り分けられる。中を歩きやすいのは照葉樹林か火山性荒地であり、登山ルートはこの範囲に取る必要がある。クロマツ林やカンザンチク地帯に迷い込んでしまうと、ちょっと楽しいことになりそう。

実際に岳に上ってみると、同じ照葉樹林でも3つの山の噴火が収まった時期によって垂直分布が異なっているのが面白かった。

指標になるのはマルバサツキとヒサカキである。火山活動が収まった荒地には、低地のほうからまず強力な菌根植物マルバサツキが侵入し、しだいに山を登ってゆく。ついでヒサカキが、これは液果をつけ鳥を利用できる植物で、マルバサツキの後を追って行く。気候の激しい頂上部にはなかなか定着するのが困難なようだが、いったん地表が植生に被われると、次第に樹高が高くなり、森らしさを形作ってゆく。樹高1～2mのヒサカキにコシダが混じった群落ゾーンは最悪なので、これががどの標高さに分布し、これをいかに避けるかが、登山する上で重要になる。

1999年の秋に訪れた際は、太陽丸から古岳南面のすばらしい照葉樹林をみたので、この方面から古岳に登った。ここは標高400mあたりまで照葉樹林、その上はヒサカキ帯で少々ヤブこぎだが、500mあたりから岩壁混じりの高山的な植生になった。なかなか気分のいいルートだ。

左:フェリー太陽から古岳南面。美しい照葉樹林に被われている。1999.11.24.

右:根を張ったマルバサツキを掘り起こすとは、なんという強風だろう。

感慨深げに微笑む相田英明現在パパ。1999.11.25.



今回は東面と西面のルートに登って見ることにした。口永良部の知人マサユキさんによると、本村側から登りやすいのは、新岳南西面の土石流地帯から新岳北西に回りこむルートで、これが普通ルートということである。

## 登山の記録

2000年4月19日 口永良部島縦走  
小原比呂志、岡田愛、伊藤ふき代

今回は、西面から登って野池、新岳、古岳と、口永良部の高いところを全部歩いて見ようというプランだ。

新岳と古岳の西面は、スダジイを主要種とする照葉樹の勢いのある森に被われている。部分的には、かなり古い自然林もあるが、大半は切株から萌芽したらしい2次林だ。新岳と古岳のあいだの谷間が、西に向いた大きな崩壊地になっており、その下流は土石流となって、この照葉樹林を分断している。この土石流跡から登るのがノーマルルートである。

12:00、ちょうど、新岳西面のものすごい土石流跡に車をおき、砂防堤から登り始める。まず野池に向かい、その後南下して新岳を越え古岳西面の樹林帯を降りる予定である。

後から聞くと、土石流をそのままたどればよかったのだが、考えすぎて、南へそれてしまう。ルートに戻ろうとして、クロマツの再生林に入り込んでしまい、尖った葉のブッシュの中で立ち往生した。マツのヤブこぎは初めてだったが、針葉樹という言葉の意味を身をもって知る結果になった。「いてて」「ててっ」と叫びながらなんとか元に戻って、テープを見つける。「テープから左へ左へと進むといいそうです」と微笑みながらつぶやく岡田愛の言葉を信じ、左の支流にはいると、これがまたヤブのかぶった暑苦しいルートだったが、なんとか展望のきくところまで抜け出した。ここで一息。山腹一帯はみごとな照葉樹林、見上げれば山頂へひたすらガレ場が続く。

マルバサツキの低木が混じる急斜面を登って行く。と、青いコードが横に引っ張ってある。これは京大の地震観測施設へのサインで、これを左へとたどると、機器をセットしてある箱にぶつかった。ここから新岳の火口縁を目指して登ってしまうことにする。

14:00、火口縁到着。噴火が収まったばかりの新岳火口は、地獄のような様相だ。火口を覗き込もうとしてふと気がつく、足元に亀裂が入っている。思わずとびのいて火口を迂回しつつ野池に向かう。

新岳北東の鞍部にも大きな火山性の亀裂がはいっておりびっくり。この亀裂は雨の浸食も進んでいるのかほとんど峡谷状になっており、新岳頂上付近から延びているのが地形図にも記されている。前回は凄惨な強風だったが、今回も吹き飛ばされそうなほど風が強い。

野池側は新岳と違ってかなり上まで植生があり、ヒサカキのブッシュの中に懸命に大きくなったマルバサツキが点在する。野池 620m ピーク北西の広い頂稜にあがると、カラコンテリギの群落がひろがり、まるで手入れされた庭園のようだ。その北東に野池の火口草原がサファリ風に見下ろせる。よく見るとそのなかに鹿が数十頭いて、すでに気づいてこちらをじっと見ている。火口の内斜面は緩やかで、高さ3mほどのヒサカキの純群落におおわれている。ヤブこぎも無く草原に降り立つと、鹿はすでにほとんど逃げ去っており、最後のひと群れが駆け出してゆくところだった。

遠目には平らにみえた火口草原だったが、下りたって見ると、地雷原のように穴ぼこがあいており、現実離れした不思議な風景だ。岡田愛がいなくなったと思ったら、穴ぼこにごろごろ転がりこんで遊んでいるのだった。散乱する大小の転石は、新岳噴火の際の噴石だろうか。14:30。

鹿の楽園の池を後にして、今度は新岳山頂にむかう。先ほどの鞍部にもどり、火山性亀裂を横目に見ながら火口縁の東をゆく。こちらから見る火口も、いっそう凄まじい。近づくと、硫黄の噴気がとところどころに見られ、活火山らしい雰囲気のみちている。強風の中、ボロボロの尾根を伝い、15:15、657mピークに達する。これが口永良部の最高点だ。

西と南は小さな岩壁になっており、その間が短い岩稜になっている。北に戻って、西壁の裾の崩れやすいガレ場をトラバース。古岳との鞍部から古岳火口を見ると、北東側の火口縁最低部から、道らしきものが見え、七釜方面へ下っているのが見えた。硫黄搬出の時代に使われた道だろうか。

16:00、古岳649mピークから西へ落ちている尾根の一つ南の尾根を下降路に選び慎重に下降を開始する。出だしてルートの間違えてヒサカキのひどいヤブに入りこみ、やぶごぎをしてしまったが、あとはうまく露岩をつないで、17:45、林道に降り立った。前回森歩きを楽しんだ地点に出ようと思ったのだが、残念ながら尾根を一本はずしてしまった。デポしてある車はすぐそばだったので、まあ、計画どおりということで、気分良く湯向に向かった。

### 2000年4月20日 古岳火口周遊 小原比呂志、持原道子

朝から雨模様だったが、午前中なんとか天気を持つことを期待して湯向の民宿「恵文」を出発する。

前日見た古岳火口から東へ下っている道跡は、おそらく昭和初期まで硫黄採掘基地だった七釜への硫黄搬出路だったのだろうと見当をつけていた。古岳の南西面はすさまじいカンザンチクの群落におおわれてとても踏み込める状態ではなさそうだが、古岳から新岳東面の口永良部最大の川、モチヤマ谷流域は、植生図をみるといい照葉樹林におおわれているようだ。ルートはこの森から搬出路につなげてみることにする。

湯向から牧場を抜けて七釜までは、ほぼコンクリート舗装されている。本流のモチヤマ谷は、地図からみると火山の荒れ果てた谷を想像していたが、意外なことに森につつまれた、しっとり感のある良い谷である。「モチヤマ」といえば屋久島ではヤマグルマからトリモチを採った所の意味だが、ここにもヤマグルマがあるのだろうか。遡ってみたい谷だ。

古岳から降りている左股の橋近く、標高200m付近にテラノを停めて様子を見る。この近くに昭和8年に新岳の噴火で全滅したという七釜集落跡があるはずだが、道を車で走っただけではどこにあるのか見当



左:野池の火口はシバに被われ、鹿が群れている。2000.4.19.

もつかない。

山へ続く森は期待通り、樹高のある雰囲気の良い照葉樹林である。古岳まで標高差400m。なんとかかなりそうだ、と決めて登り出す。9:55。

いくら進まないうちに、見覚えのあるピンクのテープが垂れ下がっている。屋久島で使っているものだ。誰がつけたのだろうか。屋久島の一部では濫用気味で響きをかっているショッキングピンクだが、口永良部で見るとひとの体温を感じ、懐かしく思えなくもない。

さてこのテープを追跡してゆくと、なかなかスムーズに登って行ける。大きなシイ・タブ林(20~25m)はそれほど続かず、標高300mからヒサカキ林(10mくらい)に代わる。ルートはふと南にそれ、小さな沢型を渡ってから395m標高点にのぼる。ヒサカキは次第に小さくなり、背丈くらいの灌木林になる。この感じは前回の古岳南面とほぼ同じだ。

テープは実に意欲的に付けられていて、この埋もれていたようなルートを明らかにしようと奮い立つ設置者の喜びが感じられる。でもあまり張りきってつけまくと足りなくなるぞ、と思っていると、案の定ピンクテープは次第に短くなり、ついに使いきって姿を消してしまった。いったんテープなどに頼ってしまうと、そこから自律して行動を再開するのはけっこう大変だ。ヒサカキのヤブに鹿道が錯綜するなか少し困ってしまったが、よくさがすと古いテープがちらりと見えた。

ヒサカキにマルバサツキが混じりだし、展望が良くなる。このルートはどうも目当ての搬出路より南に逸れて、火口の外縁に直接登っているようだ。一応テープに敬意を表すことにして、そのままたどって行くと、やがて古岳の東外縁に飛び出した。10:55、登り口からちょうど1時間。

火口から強い硫黄の臭いが流れてくる。相変わらず風が強く、ガスにやられる心配も無いと判断して、時計回りに一周することにする。火口縁はマルバサツキの大群落である。雰囲気は北海道の高山帯を思わせるものがあり、小さく刈りこまれたような樹形は厳しい気候を感じさせる。花の時期にはさぞ美しいだろうと思う。風の弱いところからヒサカキが侵入し始めているので、古岳も時がたてば、野池のようにヒサカキに



右:新岳の火口は地獄のように恐ろしい。小原も双眼鏡をのぞくふりをしているだけである。2000.4.19.





左:古岳東面の395m地点から、新岳山頂を見上げて嬉しそうな持原。そろそろヒサカキのヤブ地帯。2000.4.20.

右:火口内の噴気口に、硫黄採掘のための石垣が残されていた。2000.4.19



被われてくるのだろう。

11:20、649m古岳頂上着。ここから、火口底の小屋跡らしきものが見える。火口縁の最低部へ回り込むとそこかしこに硫黄の噴気がでている。その回りにはなぜかコモウセンゴケが多い。火口は差し渡し500mほどの外輪のなかに径200mほどの新しい火口が一段落ち窪んだ形になっており、火口底は水がたまるらしくまったくの平面になっている。お決まりのように石を並べて書かれた名前、滞在中にお会いした口永良部のみなさんと同じ姓である。

11:40、広々とした火口底に降り立つと、正面に激しく噴気がふきあがる。その強い硫黄臭に故郷の匂いをかぎ、なぜか胸が震えるような懐かしさを覚える。

火口縁からはわからなかったが、けっこういろいろな採掘の痕跡が残っている。649m頂上の直下方向に小屋の基礎はあった。休憩所だったのだろうか、あるいは採掘の監督所だったのだろうか。民宿「恵文」のボリュームある弁当を食べながらあたりをみると、小屋陰にはユノミネシダの株がある。どうもこのシダの好みが分からない。こいつ基本的にこういうところが平気な種なのだろうか。

噴気口に近づくと、噴気のあたるところに石垣の様に岩を積み重ねてある。岩に硫黄を結晶させて、欠き取るのだろう。霧島のえびの高原では平坦なところに煙道をつくってそのなかに噴気をみちびく仕組みだったが、ここではそうもいかなかったのだろう。地獄のような労働だったに違いない。

12:25、火口最低部から外に出て、新岳から見た道を探す。実際の廃道は遠目に見えるほどはっきり残っていないのが面白いというか困りものだが、まあこれだろうというのを下ってゆく。採集した硫黄鉱を牛馬に乗せて運んだというだけあって、かつてはしっかりした道だったようだ。くねくねと丁寧に降りて行

く道を慎重にたどると、次第にヤブがかぶりだし、そのうち完全にヒサカキとコシダに埋もれてしまった。

せっかくここまで残っていたのに、と悔しい気もするが、登りのルートもそう遠くなさそうなので、ヤブをこいで南へ鹿道をひろって進む。すぐに赤いテープを発見。そのまま一気に下って13:25、車にたどりついた。それと同時についに雨が降り出す。東面の良いルートを確認したことに気をよくしながら、南回りで本村に向かい、海班と合流した。

が、港に着いた我々を待っていたのは「太陽丸欠航！」の知らせであった。一応スケジュールをチェックすると、おおむね問題はなさそうである。この嬉しいニュースをかみしめるべく、松本社長を先頭に、一行は酒屋に向かったのであった。

## これから

口永良部は小さな島である。しかし屋久島の花崗岩の森と溪谷の豪壮ながら安定した姿を見なれた眼に、口永良部のダイナミックな自然はひととき鮮烈に写った。噴火を繰り返す苛烈な活火山と、必死に食い下がり、じわじわと版図を広げつづける生態系の姿。

それらを見極めつつ利用し、時には翻弄されながらも維持される心豊かな島の生活。この島のゆったりとした感覚は、もしかすると今の屋久島からいつのまにかうすれつつあるものではないだろうか。そして素晴らしい温泉。この次は野池周辺と、モチヤマ谷の火山溪谷を探って見ようか。

隣の島がこれほど新鮮な衝撃を与えてくれたのは驚きであり大きな喜びだった。屋久島の近くには多くの島があることだし、それぞれの異なる自然を総覧してみたいものだ。屋久島のみから見えるものより、一段とスケールアップした素晴らしい展望が広がるに違いない。

## タスマニアの森と動物たち

市川 聡

### 1. はじめに

2000年3月下旬、市川家家族5人の初めての海外旅行が行われた。

目指すは南半球、オーストラリア大陸と南極大陸の間に浮かぶタスマニア島だ。

タスマニアとの出会いは、映画「タスマニア物語」に遡る。といっても当時その映画を見たわけではなく、タスマニアロケで取り損ねたシーンを屋久島で撮影したいという相談を受け、写真を見せてもらったのが最初の出会いだ。

ヘゴが生い茂る苔むした森は、まさに屋久島とそっくり。それ以来ずっと心にひっかかっていたタスマニアへ、結婚15周年を記念して、上陸することとなった。

### 2. タスマニア概況

タスマニアは、オーストラリアの南東約200km南氷洋に浮かぶ面積約68000km<sup>2</sup>、北海道より少し小さな(約80%)島である。緯度的には、赤道を挟んでちょうど北海道と同じような位置にあたる。

とはいえ東オーストラリア海流(日本における黒潮のようにオーストラリア東岸を赤道から南下する海流)の影響か、山岳部を除けば、冬場も氷点下になることはなく、夏は涼しく、冬は暖かい穏やかな気候のようである。屋久島から行った感じでは、季節が春から秋に移行しただけで、気候的にはちょうど同じといった感じであった。

地質的には、 Gondwana大陸が分裂した際に地核から吹き出したマグマが固まってできた粗粒玄武岩や堆積岩、花崗岩などでできており、現在、火山はない。

島の中央から南西部にかけて主峰 Mt. Ossa (1617m) をはじめとする脊梁をなす山々が連なり、広大な世界自然遺産エリア(島の約20%)が登録さ

れている。国立公園やその他の保護地域を入れると、島の約40%が自然保護のためのエリアとなっている。

これらの1500m級の山並みが、卓越する偏西風を遮り、西部には多量の雨を降らせ(年間3000mm程度)、これが温帯雨林 Rainforest を形成し、一方東部(年間600mm程度)には、乾燥したユーカリの林が広がっている。

また豊かな自然の中に、多彩な動物が棲んでいる。

氷河期には、オーストラリア本土と地続きとなっており、共通する動物が多いが、タスマニアンデビルのように本土では絶滅してしまっただけで今ではタスマニアでしか見ることができない貴重な動物たちの姿を容易に見ることができるのも大きな魅力のひとつだ。

人口は約47万人。実にゆったりと

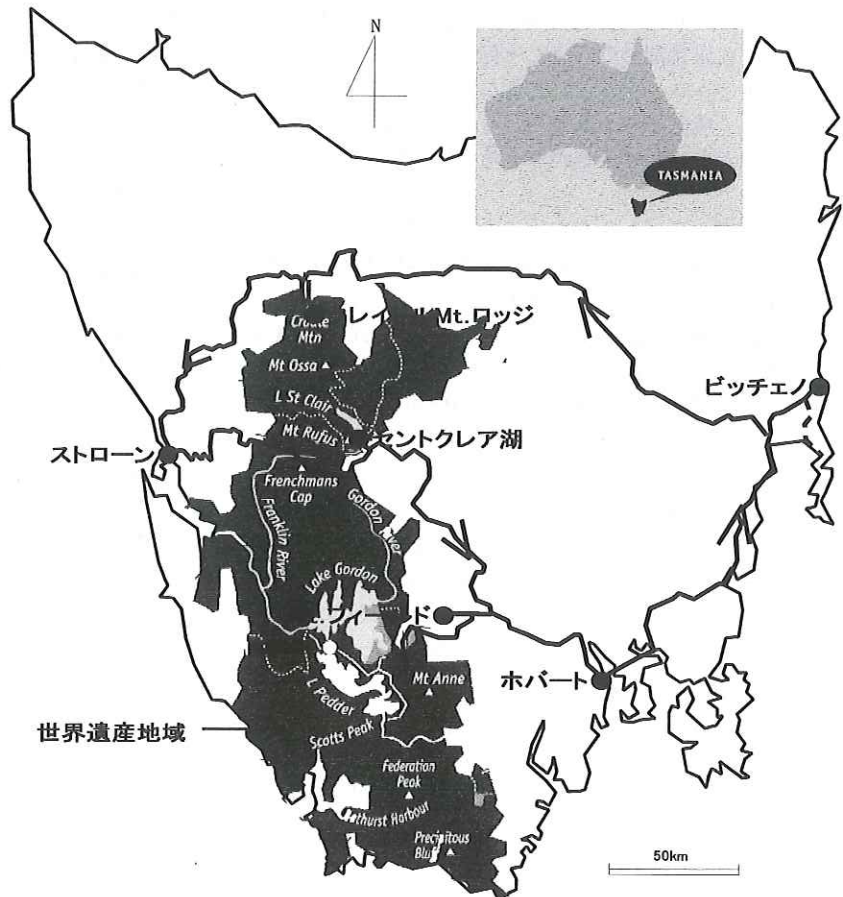
した環境である。世界で最も空気の美しい島とも言われている。

### 3. ツアー行程

今回のツアーは、Australia Japan Public Relations (AJPR) のコーディネートで行った。

こちらが要望したのは、①ペンギンを見たい。②タスマニアンデビル、ウォンバット等の有袋類を見たい。③ハリモグラ、カモノハシといった単孔類を見たい。④温帯雨林が見たい。⑤垂直分布が見たい。⑥ヒューオンパイン(Huon Pine)が見たい。⑦スワンプガム(Swamp gum)が見たい。とわがまま放題だったのだが、担当の千々岩さんが良く計画を立ててくださり、野生のハリモグラ以外は、すべて見ることができ大満足の旅行となった。

行程は以下の通り。



まず州都ホバートで下調べをした後、ペンギン見学に東海岸のビッチェノへ移動。

そこから島を横断し、タスマニアのエコツアーの中心地ともなっているクレイドル Mt. ロッジで3泊、更に西へ進み西海岸のヒューオンパインの集積地であるストローンでゴードン川のリパークルーズを楽しんだ。

その後、再び東へ向かって島を横断し、セントクレア湖のほとりのとても素敵なきャビンに1泊、そこから Mt. フィールドに移動してスワンプガムの Tall tree の森を歩き、山上の湖ではカモノハシも見ることができた。

そして最後は再びホバートに戻り、ウェリントン山からのホバートの夜景で、タスマニアとの別れを惜しみ、タスマニアでの9泊 10日の幸せな日々は幕を閉じた。

#### 4. タスマニアの森

##### ユーカリの疎林

メルボルンから飛び立ったアンセット航空のジェット機は、1時間足らずでタスマニア上空に到着する。このフライトは、島の東部を縦断するコースをとるのだが、空から見た初めてのタスマニアは、赤茶けた疎林といったイメージで、屋久島のような鬱蒼たる緑の森を期待していたところが、いささか拍子抜けしたものだ。

先に述べたように、タスマニアは、東西に降水量に伴う大きな気候差があ

り、東部は乾燥したユーカリの疎林、西部は Rainforest と東西ではっきりと異なった林相をしている。また西部は脊梁をなす山々により山岳地域を形成するが、東部は比較的平坦地が多く、平坦地のほとんどを占める羊の牧場が、この季節は草が枯れて茶色くなっていたために、全体に褐色のイメージが強調されていたようである。

この東部のユーカリ林は、頻繁に山火事にあうことによって維持されている。我々のドライブの途中にも、真新しい山火事後に遭遇した。

ユーカリは、バクチノキのように、樹皮がぼろぼろとはがれ落ちるものが多い。この樹皮が良く燃えるために山火事が広がりやすいという。こうして林床の植物を焼き払い、そこに後継樹を育てて林を維持していくのがユーカリの生き方だ。

##### 亜高山針広混交林

牧草地とそれを取り巻くユーカリの疎林というオーストラリアらしい景観も、中央の山岳地帯にさしかかるに従って、次第に緑が濃く変化してくる。ユーカリの中に、マートル (Myrtle) と呼ばれる常緑のナンキョクブナが混成してくるからだ。

標高約 800m のクレイドル Mt. ロッジ周辺まで登ると、あたりはマートルにスギ科のキングビリーパイン (King billy pine)、ペンシルパイン (Pencil pine) や、マキ科のセロリトップパイン (Celery-top pine) といった針葉樹



ヤクスギそっくりの King billy pine

が混成する典型的な亜高山の針広混交林となる。

スギのある苔むした森、ここはまさに屋久島そのものといってもよい森だ。屋久島では岩や倒木など地面より出っ張ったところが苔むすが、タスマニアではそれこそ地面まで一面苔の絨毯を敷き詰めたような緑に覆われ、それはそれは美しい。

その中でスギと同じように、川沿いなどの湿った場所を好むキングビリーパインやペンシルパインは、見た目もスギそのものと言って良い姿をしている。さしずめ葉が鋭く長いキングビリーパインはヤクスギ、葉の短いペンシルパインは普通のスギといったところか。大きなものは樹齢 1000 年を超えると言うからまさにヤクスギそっくりである。

セロリトップパインは、枝が葉のような形になるエダハマキ属の樹木で、枝の先端がセロリのように見えることからその名前がついたと言われる。この木とそっくりの樹木が、ボルネオのキナバル山にもある。他にも Tea tree といってキナバルのサヤッサヤツにそっくりの木があった。南半球から東南アジアにかけて分布するこれらの植物によって、タスマニアとボルネオは明らかにつながっているのである。ということは屋久島とタスマニアもボルネオを介してつながっている！ということか。

ところでこのあたりの優占種である常緑のナンキョクブナ・マートルは、ブナとは言うものの、1cm ほどの小さな葉が茂る樹木で、遠目にはツガに似た針葉樹のような姿をしている。よく



Ballroom forest (中央がパンダニ)

よく見ると一つ一つの葉の形はブナと似ているのだが、学名の *Nothofagus* は、ブナとは似て非なるものという意味で、特に近縁ではないようだ。純林を作る場合もあれば、針葉樹と混交したり、ユーカリと混交したりするのだが、いずれにせよタスマニアの温帯雨林の中心的存在であることは間違いない。

この森の中でひととき異彩を放つのが、世界で最も背の高いヒース植物と言われる、ツツジ科に近い仲間のパンダニ (Pandani) と呼ばれる樹木だ。その名の通り、熱帯のパンダン (アダンの仲間) に似た姿をしており、椰子の木のてっぺんに竜舌蘭を茂らせたような奇妙な姿をしている。こうした植物を見ていると、やはり屋久島とタスマニアは似て非なるもの、遠いところへきたものだという感慨がわいてくる。

クレイドル Mt.周辺は亜高山地帯で、全般的にはバトングラスの草原や灌木地帯の中に混交林がモザイク状に入り組んでいる植生で、鬱蒼たる森林地帯というわけではない。その中で、ドブ湖南西岸の Ballroom forest (キングビリーパーインの森)、ドブ峡谷沿いのペンシルパインの森、マートルの森が印象的であった。

#### 西南部温帯雨林

さてクレイドル Mt.を後にし、更に西へ車を走らせると、いよいよ鬱蒼たる緑の森が広がり始める。この西南部の鬱蒼たる温帯雨林の中にあるのが、銘木ヒューオンパインだ。

木目が非常に細かく、樹脂が多くて香りが強く、腐りにくい。樹齢は 2000 年にもなるというから、タスマニアの



苔むしたヒューオンパイン



Mt.フィールドの Tall trees forest

ヤクスギといっても良い存在である。

残念ながらその美しい木目と加工のしやすさから乱伐されて、今では一部の地域にしか残っていない。このため厳重に保護され伐採は全面的に禁止されている。現在使用されているのは、倒木やダム湖に水没した木ということだから、これまたタスマニア版土埋木といってもよいであろう。

このあらゆる点でヤクスギとよく似たヒューオンパインを見るためにゴードン川のリバークルーズに参加した。上流の上陸ポイントに 10 分ほどで回れるボードウォークがある。何本かの苔むしたヒューオンパインを見た後に、樹齢 2000 年と言われるヒューオンパインについた。あまりにも生長が遅く木目が細かいため、2000 年といってもあまり大きく感じない。残念ながら風で傾いており、元気がなさげで、いまいちインパクトに乏しかった。

西南部の森林は、タスマニアで最も原始の姿をとどめているといわれている

が、それゆえに容易に近づける場所も少ない。もう少しじっくり歩けるヒューオンパインの森のコースが欲しいところだ。

余談ではあるが、このヒューオンパインは落枝などから栄養繁殖できるらしく、Mt.Read では、雄ばかりで 1 万年もの間生き続けた株もあるという。

ユーカリ 巨人の森

ここから再び東へ向けて中央の山地を横断する。

途中、Wild river 国立公園の Franklin River Nature Trail に立ち寄った。ここもマートルが優先する苔むした温帯雨林なのであるが、その中に突然ユーカリの巨木が混ざり始める。抜きんでてそびえる樹高は、どのくらいあるのだろうか？これまでの温帯雨林とは全く違うスケールのユーカリの登場に思わず興奮した。

しかしこれは序曲にすぎなかった。

1 泊したセントクレア湖の周辺にも、Gum-topped Stringybark と呼ばれるユーカリの巨木林があった。高さ 60 m はあろうかというユーカリの純林だ。真っ青な空にそびえる巨人の姿は、実に神々しいものを感じさせた。下枝が少なく、頂にこんもりとした樹冠を作る姿は、ボルネオの樹木を思い起こさせるが、純林を作るという点が多様性を誇るボルネオとは大きく異なるところだ。

ここから更に東へ進んだところに Mt.Field 国立公園がある。ここには文字通り Tall Trees walk という巨木の森を散策するコースがある。

ここにそびえているのがスワンプガムと呼ばれるユーカリの王者だ。大きなものでは高さ 100m を超えるというから半端な大きさではない。あのボルネオのメンガリスをも凌ぐ世界で最も背の高い広葉樹である。下層はマートルやマンファーンと呼ばれる野太いヘゴの仲間がはえているものの、超高木はすべて 80m ほどの高さのスワンプ

ガム による純林となっている。この純林もやはり山火事により維持されており、山火事の発生時に一斉に芽生えた後継樹により同じサイズの巨木がそろふようだ。

タスマニアの Forest walk の最後飾るにふさわしい、度肝を抜かれる森であった。

#### 4. タスマニアの動物

セントクレア湖で宿泊したキャピンのすぐ裏に巨大なユーカリの木が1本たっていた。その根元には山火事の時にできたと思われる大きなうろがあった。窓から眺めていると、1匹のワラビーがそのうろの中に入って行くではないか。アリスがウサギを追いかけたように、うろの中を覗きに行くと、中には苔が敷き詰められ、ワラビーがちょこんと座ってくりくりした目でこちらを見ていた。

タスマニアでは、このようにとても簡単に野生の哺乳動物と出会えてしまう。哺乳動物といっても、ネズミ、コウモリ、海獣類を除けばほとんどが有袋類で、その気質のせい、おっとりとしてあまり逃げようとなし。

唯一ギャーギャーとうるさい肉食のタスマニアンデビルでさえ、顔は愛嬌のあるかわいらしい顔をしており、憎めないやつである。

その中でも筆者のお気に入り、ウォンバットだ。

体長は1m程度。コアラに近い仲間らしいが、顔はどちらかというと子熊のようで、のっそり、のっそり草原を歩きながら草を食べる姿がのほほんとしてたまらなくかわいい。後ろ姿のブリブリしたお尻は、ブタのようでいかにもおいしそうだが、尻が堅いのが唯一の防御だということから笑ってしまう。



ウォンバット

特にクレイドル Mt.周辺には普通にいるようで、ナイトドライブで、簡単に見ることができた。

この他にクレイドル Mt.周辺では、2種のワラビー、ボッサム（フクロギツネ）、クウォール（フクロネコ）、タスマニアンデビルなどを身近に見ることができた。

有袋類とともに興味深いのが、カモノハシ、ハリモグラといった単孔類だ。総排泄孔で糞も尿も生殖も行うことから、単孔類と呼ばれている。

彼らの興味深いのは、卵を産むということである。孵化した子供は、母親の乳汁で育つというから哺乳類ではあるが、なんとも奇妙な生態である。

単孔類は、オーストラリアやニューギニアでしか見ることのできない動物なので、是非とも見たいと思っていたが、幸運なことに、Mt.Field 国立公園のドブソン湖で、カモノハシと出会うことができた。夕暮れ時、鏡のように静かな水面に、音もなく波紋が広がり、カモノハシが水中に潜っていったのだ。嘴と尾の形がよく似ており、ぱっと見ではどちらが頭かわからなかったのだが、何度も浮き沈みしてくれたので、名前の由来となっているカモの嘴のような口も良く観察することができた。ちなみに今回コーディネートしていただいたAJPRの千々岩さんの奥さんでさえ、カモノハシはまだ見たことがないとおっしゃっていたので、カモノハシを見ることができたのはとてもラッキーなことだったようだ。

野鳥もまた見たこともないような鳥ばかりで、おもしろかった。

やはり興味深いのはペンギンであろうか。さすがは南極の隣というべきであろうか、夜になるとペンギンたちが海から巣穴に戻ってくるところを観察



木のうろにうずくまるワラビー



この巨大ヘゴ(Man fern)の太さを見て欲しい。

できる。

またなんといっても感激したのは、あこがれのワライカワセミを見ることができたことだ。小学生の頃、海外短波放送を聞いて、カードをもらうのが流行した。そのオーストラリアの放送がワライカワセミの声で始まるのだ。残念ながら笑ってはくれなかったが、間近で見ることができたので大満足であった。

この他にカラフルなオウムの仲間やコクチョウがオーストラリアらしくて印象的だった。

#### 5. まとめにかえて

今回のタスマニア旅行で、もう一つの興味は、国を挙げてエコツーリズムに取り組むオーストラリアのエコツアーの実態を体験することであった。

しかし正直なところ、早口でまくしたてる彼らの英語がさっぱり分からなかったのも、ガイドの技術レベルはよくわからなかった。印象的にはどうも



タスマニアンデビル

たいしたことはしゃべっていないようなのであるが…（それにしてもボルネオのガイドの英語のなんとわかりやすかったことか。）

ただペンギンツアーでは、あがってきたペンギンの数が少なかったせいか、ペンギンが我々の前をなかなか行進してくれなかったので、業を煮やしたガイドが、ペンギンを追い立てて無理矢理歩かせるということがあった。これ

が先進地のエコツアーかといささか驚いた次第である。

またクレイドル Mt. ロッジでは、動物に餌をあげないようにという注意書きがあるにも関わらず、一方で餌づけショーが行われていた。

先進地といわれながらも、まだまだ多くの矛盾を抱えつつ発展途上なのがオーストラリアのエコツアーの実態ではないのだろうか？

もう少し英語ができればはっきりしたと思うが、大胆に言わせていただければ、我々のツアーレベルは、決してタスマニア（オーストラリア）のツアーレベルに勝るとも劣らないのではないかというのが今回のツアーの印象であった。

最後になるが、近々、タスマニアツアーを実施することが決定した。興味のある方は今すぐ資料請求だ！

YNAC つれづれエッセイ

## 野イチゴ摘み

村形久美子

毎年必ず雨が降るといわれているがゴールデンウィークが今年は快晴の毎日だった。

この時季、野イチゴがたくさん取れると聞き、タッパーと軍手を手にイソイソと車に乗り込んだ。車を走らせ数分、小瀬田の山中、空き地の道路沿いに野イチゴ畑があった。よく見ると真っ赤なイチゴが見える。一目散に車から降りイチゴをひとつぶ口の中に放り込んだ。甘い。予想外の美味しさ。野生の果物は人間の手によって品種改良された物と比べるとやはり味が粗い。あまり期待をしていなかっただけにちょっとした感激だった。

イチゴと言ってもへびいちご（皆さんご存知だろうか？小さなつぶつぶが集まった直径1センチメートル弱の真っ赤な球状の実になる。味は無いに等しい。へびがいるところに生えているからと読んだ事があるが本当なのかだろうか。）の大型版でどちらかというとも果物屋さんで売っているイチゴよりはラズベリーに似ている。

大きさは直径1cmから2cmくらいで、ラグビーボールを半分にしたような形をしている。

大喜びで摘み始めるとまた違う色のイチゴがあった。薄いオレンジ色でつぶつぶが大きい。

ひとつぶひとつぶが小さなクラの卵のようだ。これも一口放り込む。美味。甘さの中に爽やかさとかすかな野性味を感じる。赤いイチゴとこの黄色いイチゴ、どちらかといえば黄色いイチゴの方が好みの味だった。

調べてみると、赤い実はオオバライチゴ、黄色い実はリュウキュウイチゴらしい。

屋久島でのバライチゴの仲間はヤクシマヒメバライチゴ、オオバライチゴの2種類がある。このうち前者は標高600m以上の山地にあり、里で半ラグビーボール状の大きな赤い実をたくさんつけているのは後者の方だ。

リュウキュウイチゴの黄色い実は直径10センチメートル程のボールにいっぱい、赤い実は全部まとめて直径15センチメートル程のボールに山盛り採れた。

せっかくなのでそれぞれを別にして赤いジャムと黄色いジャムを作ることにした。作り方は簡単。水で洗ってよく乾かし鍋に入れて

煮詰める。水分が出てぐつぐついつてきたらイチゴの半分量の砂糖を加えひたすら煮る。はい、あっという間に野イチゴのジャムの出来上がり！部屋中ふわんと甘くていい匂い。さっそく試食とってみましょう。

ジャムにしてみるとリュウキュウイチゴはなんとなくぼやけた味になってしまい、赤いほうが美味しかった。しかし、両方ともプチプチとした種が口の中で心地よく、市販のいわゆるイチゴジャムよりはずっと素敵なジャムが出来上がった。

その他屋久島にはたくさんの野イチゴが自生している。ハウロクイチゴやヤクシマキイチゴ、ナワシロイチゴも見かけることはあったが、残念ながらジャムを作るまでには至らなかった。そのほかにも、「これはイチゴに違いない。」と調べてみたがはっきりしないものもあり山の中にはまだまだいろんなイチゴがあることだろう。



オオバライチゴ

## よじのぼり

持原 道子

カヌーでお馴染みの安房川、ここの上流にあるトンゴの滝を見に行った。

松峰大橋よりひたすら泳ぎ進むこと1km弱、川が直角に曲がり、ゴーゴーと力強い水音だけが聞こえてきた。さらに泳ぐと、3段の滝が姿を現した。その中段、垂直に落ちる30メートルの滝がトンゴ。増水も相俟って、大川の滝並みの迫力。

流れの少ない所から回り込み、トンゴの下段、傾斜50度ほどの滝の岩壁によじ登る。と、そのとき、何かピョーン、ピンピン、岩壁から飛び跳ねた。 ???

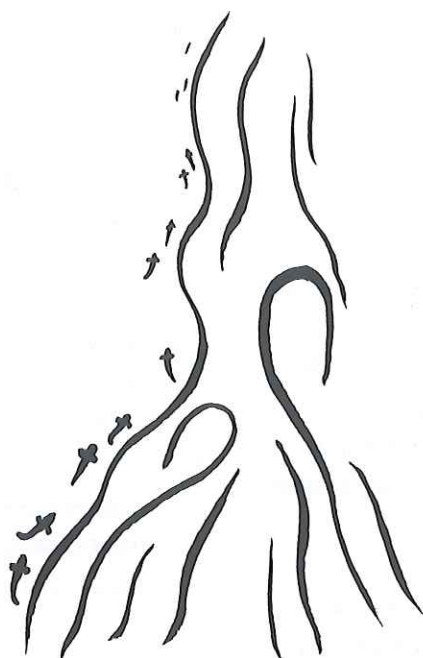
こんなふうに跳ねる生き物を、私はどこかで見ていた。そう、海の岩礁帯に生きる、ヨダレカケという一風変わった名前の魚だ。前回の通信に、この魚の事を書いたのだが、顎下に、ヨダレカケのような吸盤を持ち、波や人影から、ピョンピョン水面を飛び跳ね逃げる。しかし、ここは淡水。ヨダレカケがいるはずない。

慎重に、岩に貼り付く“何か”を見た。

ヨシノボリだった。

川で産卵し、稚魚は一旦海へ出るものの、もう一度川へ遡上するハゼ科の魚。左右の腹鰭が一体化、丸い吸盤を形成し、それを使って岩を登る——という記載と写真を、図鑑でなら見たことがあった。しかし、突然の生現場遭遇に目を見張った。

ヨシノボリは、滑り落ちて



くる水の横際にピタッと貼り付いていた。時折襲う全身を呑み込むほどの激流も、何のその。流れのふっと弱まるタイミングを見計らい、モゾゾ、ピタッ。モゾゾゾ、ピタッ。その動きはさながら、“だるまさんが転んだ”を、水飛沫という鬼と勝負しているよう。感心しつつ、水の流れ来る方を見上げると、ぞろぞろ、ぞろぞろ、ホルンフェルス岩壁の水際に、大小魚

の先客達が行列を成していた。ヨシノボリの名前の由来は、“よじ登り”からか？

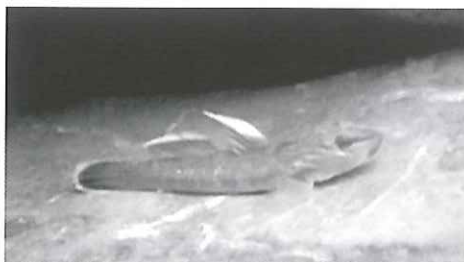
初めに見た、跳ね逃げる“何か”は、私の巨大な影に驚き、激流に身投げする魚達だったのだ。彼らの地道な一歩一歩に、何と冷酷非情な仕打ちをしたことか。申し訳ない。

ところで、四肢動物の前足と後足は、それぞれ、魚の胸鰭、腹鰭が起源となっており、陸上で歩きはじめたらしい。

遅い腕のような胸鰭で海底を歩く、イザリウオという魚がいる。それに加え、こうして陸上の岩を登り進むヨシノボリの姿を見ると、その起源に合点がいく。

栗生川の上流、小楊子川の滝もヨシノボリは登っていた。一体彼らは、どのレベルの滝まで登ることが可能なのだろうか？ どうやってルートをとり、進んでいるのだ？ 標高どれぐらいまで登るのだ？ 海へ一度出るということは、おおっ、今度は滝落ちしていくのか？

これからの沢登りの手本は、ヨシノボリだ！ 腹に吸盤をつけ、水流にめげず、滝をよじのぼろう！



ヨシノボリ

## Calendar

1999年

- 10/6~7 松本・小原、東洋工学専門学校の屋久島実習の講師をつとめる  
10/25~28 小原 霧島研修  
11/11~12 兵庫県立高等養護学校、修学旅行受け入れ  
11/24~25 YNAC 口永良部研修  
11/28 小原 環境庁自然に親しむ集い講師(西部林道)  
12/8 YNAC 自然クラブ2000 設立  
12/12 第1回 自然クラブ 明星岳登山  
12/13~19 松本 タンク耐圧・塗装に長崎・福岡へ  
12/23~30 小原 バリへ

2000年

- 1/19~24 松本 ドウマゲツティへ  
1/23 第2回 自然クラブ 七五岳登山  
1/26~30 屋久島で行われた国際インタープリター研修会に参加  
2/13 第3回 自然クラブ 海岸古道歩き  
2/18~27 市川 有隣堂ボルネオツアー/サラワク編 講師  
2/26 日赤救急法講習受講(ガイド連絡協議会主催)  
3/6~19 持原 NHK 生き物地球紀行の撮影バイトで馬毛島へ  
3/12~13 松本 国立民族学博物館エコツーリズム研究会で事例発表  
3/17 第4回 自然クラブ 花山歩道登山  
3/22~23 松本 自然体験活動指導者青年ミーティング「おやじたちが、自然を語る、職を語る、若者と語り合う」で若者達と語る  
3/24~4/5 市川家 タスマニアへ  
4/1 浜崎宏美・岡田愛 研修開始  
4/6 小原風子 宮浦中学校入学/市川初夏 安房中学校入学  
4/23 第5回 自然クラブ 春田浜でばい  
5/14 市川・持原・白浜裕樹(シングル自動車)第一回宮之浦川チューブラフティング調査  
5/18 YNAC ホームページのアクセス数、100,000件を突破  
5/21 第6回 自然クラブ ヒズクシ登山  
6/17 山の神祭り/第二回屋久島ガイド連絡協議会総会  
6/25 第7回 自然クラブ 栗生川沢登り  
6/26~27 松本・小原・市川 健康診断で鹿児島へ  
7/7~9 松本 シンポジウム「21世紀への展望一歩く旅を考える」でパネラーをつとめる  
7/16 第8回 自然クラブ スノーケリング  
7/18 韓国エコツーリズム調査団受け入れ

## Library

執筆記事

★生命の島 50号「屋久島海物語」 楽しや水族館 松本毅 出張のついでに立ち寄った水族館で、コンパニオンのお姉さんを冷やかした

## Contents

新ツアー速報	1. 西部林道マウンテンバイクツーリング	2
	2. 宮之浦川チューブラフティング	
志戸子ダイビングマップ		4
口永良部島の山と森		6
タスマニアの森と動物たち		10
野イチゴ摘み		14
屋久島ウゾウムソウ ヨジノボリ		15

ながら、水族館に囚われの身となった生物たちの人生について哲学。

★生命の島 51号「屋久島海物語」 愛があれば 松本毅 性転換をする魚たちと人間の繁殖行動を比較検討し、愛について考察。愛があるから人類だ！

★生命の島 52号「屋久島海物語」 ストーカーとスニーカー 松本毅 ストーカーとスニーカーのこじつけからはじまり、持原のホシハゼの繁殖行動に関する卒論をネタに、人類の繁殖行動について憂う。

★日本型環境教育の提案 改訂版(小学館)

環境教育の事業化「エコツアー事業化のすすめ」市川 聡 ああでもないこうでもない、理屈ばかりが議論されるエコツーリズムの世界。その中で、いよいよ実効的なエコツアーを展開する機が熟したと、全国に高らかにエコツアー起業の号令をかけたのだが。反応は???

## 編集後記

- YNAC通信復活!! 初心に返ってYNACオリジナル情報をお届けします。(ま)
- 暑いぞ～。沢登り、蜘蛛調!(お)
- 突然のYNAC通信発行決定!泣きました。(く)
- いよいよ夏本番。今年の夏はカヌーに、白谷雲水峡に、熱く燃えたと思います。(さ)
- 日日好天。飲んで、食べて、泳ぎます。(も)
- 日頃の筆無精がけたり、関西人の本領発揮ならず。(あ)
- 6/26、健康診断へ向かうフェリー屋久島島の展望ラウンジで、ビールを飲みつつ、YNAC通信の発行決定!スピード命で皆さんにはご迷惑をおかけしました。後お心おきなくお仕事、お仕事。(い)

YNAC通信(ワイナックつうしん)第11号

発行日:2000年8月1日

発行:(有)屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦368-21

TEL 09974-2-0944 FAX 09974-2-0945

E-mail: forest@ynac.com Url: http://www.ynac.com/